

# 方向

第二三〇号 一九九一年五月一五日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

春夢女史の 『誰 が 罪』 (五) 1991.4.23 原田憲雄編

## 第八回

「旦那様あのお湯を」

とお竹は敷居に手をつきていふ話好(はなしずき)の正一おと膝を打って

「余り話に夢中に成ってすっかり忘れていましたさあ岡野さん湯をお召しなさい」

「否(いふ)何 お後(あと)で宜(よろ)しうございます」

「私どもはお先へ失礼いたしましたどうかお構ひなくごゆっくり」

「それではご遠慮なく頂戴致しませう」

岡野はお竹に案内されてざつと湯をつかひ座敷に帰ればはや夕飯の支度は調ひ居りぬやがて倭文子(わぶんこ)か給仕にて正一と共に食事を終へ縁にいづれば涼風心地よく吹きて旅(つかれ)の労もとみに忘れはてけり此度は叔母なる人も出で来り可愛らしき弟も倭文子が側に座し面白きお竹も未座(みざ)にひかへ皆々して四方山の話に時移りたれば今宵は岡野はこゝに一泊することゝなりけり

其翌日岡野は思はず昨日の勞に寝すごして今朝は家族が居間にて朝飯に向へど尚正一の影見えねば

「お父様は」

と倭文子の方を見れば今しも茶を入れかけし倭文子は岡野を見上げて

「鳥渡急な用事で今朝早く外へ出ました」

岡野はハンケチにて口の辺を拭きつゝ少しの悪る（悪）ような顔して

「どうもお早いですな私は非常に寝坊を致しました」

と今度は叔母なる人の顔を見ていふ叔母は烟草盆に火を取りながら

「そりや貴方（つかせ）勞てお出な（いで）さるからです最（もつ）と御ゆ（ゆ）っくりお休（やす）みになれば宜（よろ）しうございませすのに」

と火鉢の抽斗（ひまたし）より拭布（ふきぬ）を取出して丁寧に烟草盆の端（はし）を拭きて岡野の前に出し

「別に見物するほどの所でもございせんがその臥牛山へでも御出になつたら……ねえ倭文子さんあなたお連れ申（ま）たらい（い）でせう」

「はい父様もそう申（ま）て（い）したか別（べつ）に見る程でもございせんがお後でお供致（ご）ませう」

かくて岡野は食事をすませ座敷に帰り昨日の日記を書き居るに倭文子は幸（あ）にお叔母や竹の前差（さ）かければ彼は兄様を尋ねてきた方なれば我客でない（わが）と云はぬばかりの顔つきして縫（ぬ）ひかけし仕事を初めぬ叔母は倭文子が心知らねば少しく驚（おど）きたる調子にて

「倭文子さん今日はそんな事およしなさいな人が来ているのに岡野様もお退屈（たい）でせう早くあなたも支度（し）してお連れ申（ま）なさいな」

「でも叔母様何かなすつていらつしやるのよ」

「そりあ鳥渡為すつたのでさあねそんな事云はずに早くなさいよ」

倭文子は強ても逆ひかね一寸帯引きしめ直して

「そんなら臥牛山が矢張りムでせうあすこへお連れ申ませうか」

「あゝそれが好でせうあの上から沖を見晴らした景色はなかゝム東京などでは見られやしませんから又珍しくお思ひなさるかも知れせんよ」

倭文子はそれでも唯二人ぎりじや羞かしくどうかして行かぬ工夫もやと思ひ

「随分暑いことねえ叔母さん」

強く此の言葉に力を入れし甲斐もなく叔母は仕事の手を休め

「暑い事は暑いかつひ其所じや有ませんか愚図々々しないで早くお出なさいなお父様もそうおつしやつたのでせう」

少し憤悶たい様に然し顔には充分の笑を含み立って居る倭文子を見上げぬ最早この鋒先には当り難く

「はいムム参りますよ」

と叔母の顔を見て笑ひつゝかの座敷を窺へば岡野は淋しそくに縁端に立て外を眺め居たるに有繫の倭文子も氣の毒に思ふ心簇々と起り恥かしげもなくつと進みて

「お退屈でございますせう」

岡野は別にこの返事も為さず

「実に好い景色ですなあの松原の間から白浪の見える所などはとても東京などにはありませんな貴嬪などはこんな所にお出なさるんですからさぞ好い歌が沢山出来たでせうな少しお見せなさいな」

「あら何にも出来やしません毎日遊んでばかり居りますから」

「うそ々々僕みた様な者には見せるのが惜しいのでせう」

「真倒さうじやございませんほんとうでございます」

倭文子が真面目になつて迷惑そうにいふに岡野は可笑しくもあり氣の毒でもあり

「それじやそうとして置きませうして先程お話の臥牛山とかいふのは遠いのですか」

「いゝえつひそこでございます貴方お出に成ますならお供致しませう」

「参りたいですな然し暑いのに貴嬪ご迷惑でせずな」

岡野は最早妻と獨り定めた倭文子人が見ねば手を引き違ふても行きたき程なれど倭文子は恥かしくろくに口も聞かず岡野が左側を通れば自分は右側に行き岡野が右側に来れば左側を通りさなくば遅れがちに行くに岡野も余儀なく無言のままにて六間ばかり先より左へ折れ一町ほど行くに左に川ありて右に山あり倭文子は山を指さして

「岡野さんこゝでございます」

黒木の洒落た門の上に筆太に臥牛山と書てある字を岡野は口の中にて読みつ

「成程なか々洒落ていますなこゝから登るのですか」

倭文子は門の側によりて岡野に道を譲るに彼は立止って

「さあいらっしゃい」

「いゝえどうか貴方お先へ」

岡野は笑ひながら

「貴嬢が案内者じや有マませんか」

「ですけれども道はわかつて居ります」

彼女は莞莞爾として俯向き下駄の先にて小石を転ばして居る横顔の美しさ岡野は一時に血が頭に登りし様な心地してつと倭文子の側に進み

「それなら一所に行きませう誰も見ていないからいゝじや有マませんか」

と彼は大胆にも倭文子が雪の様な綿の如く柔かな手を取らんとしけるに彼女は耳みみ朶ぼまで真赤にして返事に苦しむ様さまを見てはそれも成り兼又自分ながらも余りの事いひけるよと心づきて見れば羞かしくもあり

「そんな事ことた偽いつはりですじやお先へ失礼ませう」

歌人・大塚五朗

(二二)

1991.4.24

原田憲雄

天橋立

一九三八年(つづき) 五朗、四十一歳。

『水鏡』昭和十三年九月号。(六、七、八月号は、切り抜きなし)

浜 昼 顔

思ふことなしにはあらね一夜来て先づは楽しと酒くみかはす 天の橋立

海も山も晴れて夏めくこの浜にひと日のひまを盗みてわが来し

昏れ空にともりて遠き灯の在り処(ど)成相山のケーブルといふ

昼顔の花はおのづとしほみ来ぬ上げ汐時と海の曇るに

汐ぐもる浜松原を人ゆきてしばらくありてしはぶくこゑす

兵あまたたちて空しき日の明り夾竹桃の花さかむとす

この旅は八月十一日から三、四日かけてのものであった。

『日蝕の庭』一八頁の次の四首は製作時がわからないので、ここへ編入しておく。

残暑いまだ去らねど今朝を咲きそめて庭の芙蓉の花はしづけき

山茶花の咲くべくはいまだ間のありて乏しき庭のながめとなりぬ

散り残るわづかの花に蜂の来てひと日遊べり朝よりの晴れ

横ぶせる山の幾山けさ晴れて流らふ雲は秋づきにけり

九月十七日消印、原田憲雄宛葉書が残っていて、次のようにいう。

御無沙汰多謝、かけちがつて御逢も出来ず申わけ無之候、近頃作歌如何に候や、小生はからきし出来ず困り

居り候／今月廿四五日頃ひよつとしたら移転仕るべく、移転前に一度御来遊如何に候や、……／この石松庵  
もおさらばかと少々物さびしきもの有之候……

そうして二十五日付の謄写版ずりの転居通知に新住所を「京都市右京区花園巽南町一五」とし、町名には  
「ソナン」とルビが振られ、略図がついている。この転居は、松子夫人の話では、小学校長を退職後、京都に  
来ていた夫人の両親と同居するためだった。新居は、石松庵にくらべてずっと広く、二階は南にむかって開け、  
山陰線のむこうの太秦の田野が見晴らせた。『水甕』昭和十四年三月号までの詠草はこの年の作品である。  
十四年一月号。

北陸遊草拾遺

あかときとすがしき霧の中にあて鳴く鯛のこゑ車窓(まど)をうつ (庭吾、水甕なし)

海女一人岩の上にあてあなひそか裳紐解き放(さ)けてはばかりもなし (〃五)

海女がふく口笛の音は海面の曇りをひびくそこにまたここに (〃〃)

夏すでに鳴きしく虫か海岸のもろこし畑に昼の風吹き

戦に国は驕りて勢(きは)ふとき君陣没の報をわがきく 伊東准尉(三中の教練教諭)

持つ持たぬこの動かし難き現実のきびしさにして民族は動く

同年二月号。

冬日哀情

かかること常なき父と娘（こ）のひとみなかなか笑まず銭はにぎりながら

自（し）が編みし巾箱（きんちやく）に銭をしまひつつこの娘やつひにほほと笑ひぬ

はきためし落葉焼かすと縁側に胡坐ゐてたのし日曜の朝を

（新居二首・庭三〇、水麩なし）

梧桐（あをぎり）が二三本ありてそれだけの庭ながらよく鳥の来て鳴く

（〃〃、〃〃）

落葉はきて見のあらはなる庭土に隣の屋根を越して日の射す

（庭三）

簡素なる眺めとなりし冬庭の朝はればれと高槻の影

（〃〃、水麩なし）

同年三月号。

養 虫 庵

ひそひそとどこよりか窻の音はしてこの林泉（しま）すでに夕光（ゆふかげ）となれる（夕光となる）

（庭五・続風土三六 伊賀）

しつけさの其所（そこ）だけは少し動きゐて林の奥に水滴（た）るる音

（〃〃）

留守居人戸を繰りひらくしばらくをわが佇（た）ちて見る石蔭（つはぶき）の花（〃至・〃）

（〃 伊賀阿保村三首・〃）

粉をやく火があかあかと燃えてゐて霜夜の風の吹くはしつけき

（〃

土やせて木草そだたぬ伊賀の山あかあかと冬の日が当りゐる

（続風土三三六）

見てゐるに山の日射しのうつろひて深々と青き冬山の牙え



寒々と空に日のある冬野原ゆきつつぞ遂にさぶしくなりぬ

(庭三ヶ・続風土全情余)

十二月二十五日消印、原田宛葉書に、

瓢然(ママ)と東海道鈴鹿越えの旅に出て来た 同行は岩見・森永の両氏。今関の宿について今宵は関どまり、膝栗毛らしい妙味はないが、空は青空、冬山は美しい、明日は伊賀の上野から、森永さんの家へ行つて一泊、廿七日には帰る、

一九三九年 五朗、四十二歳。勤務先、同じ。住所、京都市右京区花園巽南町十五番地。松子四十一歳。朗、十九歳。喜子、十五歳。樹、十一歳。哲、八歳。迪子、五歳。

日付・消印はないが、この一月十日前後の原田宛葉書に、

先日は失礼しました。学校も始つてそろそろ御忙しい事と思ひます。扱て御承知の通りかつて「西の研究会」を開いてゐたのですが漸次人も少くなり中絶してゐた様な次第でした。ところが此頃支社の歌会も少く、いささか沈滞気味であるところから、加地さんなどがしきりに西の研究会を再起してくれないか、一つ本氣になつてやつてみたいし、四五人(勿論それより多ければないんだが)あれば元氣も出るしと、しきりに懇懇された様なわけで、小生も今年あたり大いに頑張るべきであると思ふので引受けて骨を折らうと約束しました。で君にも是非参加して貰へないでせうか、方法、会場(多分加地さん宅か小生宅になる)等は研究の上決定したいと思ひます。会費はとらない方針です 御忙しい事と思ひますが、一つ御力添へ下さいませんか 右御都合御伺ひまで

「西の研究会」というのは、水壘京都支社の歌会のほかに、五朗を中心に十名くらいの会員で開いていた研究的な歌会である。支社の歌会は、和氣藹々としてはいるがおしゃべり会のようなもので、歌の互評はおざなりであり、若い会員の間から不満がでていた。一月二十一日消印の葉書。

前略御免被下度候／扱て例の研究会、御かげで成立 二月より正式の研究会を開くことにして 顔合わせの会を次の様なことで開き度いと思ひますから御出席下さい／一、一月廿四日（火）午後六時半より（時間厳守）／一、場所 大塚宅／一、人員 大塚・加地・斎田・滝野・高田平二郎他二三名

「人員」のうち、加地富子は医師の夫人。斎田は記憶がおぼろになっている。滝野正三は高等蚕業学校の事務員だったように思う。高田平二郎はペンネームを平二郎（たいらのじろう）といい、織工だった。森田曠平の名がないのは、前年なかごろからずっと病臥し、ややよくなつてはいたが、その回復した体力は日本画家としての修業にあてなければならなかったからであろう。森田の一月五日付、原田宛葉書に「近頃は午前中は北野へ（写生に？）行くが 午後からは眠つている。眠るのが近頃での唯一の楽しみ。雪が降つてとてもうれし。……」と書いてある。一月二十七日付、原田宛、五朗の葉書。

先晩は失礼、その節取りきめました事は／一、毎月十五日―廿日の間に会を開くこと、／一、毎月十五日迄に詠草（まあ十首位まで）を大塚宛送ること、／一、七時―十時、三時間位にして時間は厳守のこと、／一、二月は今の処十七日（金）の子定、場所は小生宅／右御含みの上、よろしく願ひます、高田君等来られるようでしたら誘つてください。可成盛大になる模様です、

近所に古い木造の二階家がある。かつては旅館だったらしいが、今では下宿でもさせている様子で、あまり人の出入りする姿を見ない。その一階表の軒にそってずっと端まで藤の蔓が伸びていて、よく手入れが行き届き、毎年季節にはうす紫の花房が軒をとりかこんでいる。わたしがちょうど通りかかった時、熱心にカメラを向けている女の人があった。わざわざ撮影に来たらしくて、準備をすっかりしてあったから、この藤は、もしかしたら評判のものなのだろうか。以前、尾道へ旅行した時には、みごとな藤の花に出会った。そういえば余呉湖の畔にも藤の美しい所があった。『植物短歌辞典』を見ていたら、梅をうたったものが九十一首、桜が八十六首、松が七十五首、ついで藤が七十首採られていたから、藤の花やその木の姿などは日本人に愛されるものらしい。

紫の藤の花をばさと分くる風こちよき朝ぼらけかな  
という与謝野晶子の歌がいいと思った。

藤娘という日本舞踊はなんとも見たことがある。藤の花枝を肩にした姿は美しいものだから、その踊りについて詮索したことはなかった。母が大病の病院に入院しているあいだ、わたしはJRの大津駅で下車して、その前のバスターミナルをよく利用した。十二月から三月まで、雨や雪の日も多く風の強い日は、地下道を通り、向かい側への階段を上がって行くと、待ちかまえていたように、冷たい風が雪を吹きつけてくることもあった。そんな時に驚かされたのが藤娘だった。地下道を上がったあたり、駅の建物とのあいだの広場に時計台があり、それ

がからくり時計だったのである。ウォーンと響くような音楽があり、扉が開く、それにつれて藤娘がすうっと出てくる。藤の花枝を肩にかけている。どんな隔りを見せてくれるのかとじっと見ていたが、手も動かさない首も廻らさない。まっすぐに出てきて止まってからすこし左へ出て、またもう一度前方へ出る。位置を決めると、すまして立っているだけであった。なんだかこの藤娘に出会っているうちに、何故ここに藤娘がいるのだろうか、大津のシンボルがどうして藤娘なのだろうかと考えるようになった。この藤娘がなんの所作もしてくれないことについて。

京都は北野の天神さんの近く、昔のチンチン電車の車庫だったところに、こども文化会館があり、その前面にからくり時計がある。前と後ろで仕掛けが異なっていて、一方はかぐや姫。竹取りの翁が出てきて竹を切ると中に女の子が入っている。もう一方のは孫悟空で、音楽がウォーンと響き出すと扉がひらきキント雲に乗った孫悟空がすうっと出てくる。右手に如意棒をもち、左の手をかざしてあたりを見まわす。そこへ猪八戒と沙悟浄を連れ白馬に乗った三蔵法師が出てくる。右人差指で行く手をさすと、孫悟空は如意棒を上げ、猪八戒は首を左右に振り、沙悟浄は鎌をうごかす。これを二度ほど繰り返してすうっと退くと、扉が閉まる。音楽が鳴りだすまでは、鬼ごっこなどをして走り回っていた子ども達が、みんな立ち止まって声もたてず、ぼかんと時計台を見上げているのである。同じことなら藤娘さんちょっと踊ってくれば、バスを待つ間の楽しみもある。ほとんどの人が見馴れているらしくて、音楽が鳴っても見上げようとしなかった。

母が退院して藤娘と出会うこともなくなり、二か月もたった頃、母の家の本立てにあった、滋賀県老人クラブ

連合会編『近江むかし話』というのを抜き出して、読んでみると「動き出した藤娘」という話があった。

吃の又平で名高い大津絵は、もともと傑出した一人の芸術家によって完成させられたものではなく、何十代かの絵師によって伝えられ、描き継がれて、洗練された郷土芸術です。

さて、その大津絵師の話ですが、いつのころか大谷のあたりに与平という若い男がいました。

と始まっている。藤娘は大津絵だったのだと、この時や々と気がついた。この与平が、熱心な大津絵師で、自分の絵に満足せず、藤娘のかざす枝の形にも、弁慶のかつぐ釣鐘のかっこうにも、もっとよい線が出せないかと工夫していた。そしてあるとき、絵の修業をするために、女房のとめるのもきかず江戸へ旅立った。それから一、二度便りがあったきり、音沙汰がなくなったので、女房が夫の安否を気遣いながら、その描き残していった絵を眺めていると、ある夜、絵の中の藤娘が藤の枝を持ちなおし、女房の目の前でびたりとみごとく構えてみせた。それは先の絵とはまるで違った美しさだった。驚いている女房のところへ、その直後、与平病死の早飛脚が届いたという話である。

駅前藤娘は、この与平の藤娘で、すこし動いて、びたりと構えてみせるというからくりらしいのである。与平は死ぬ時に、自分の修業した証しを女房に見せたのかもしれない。つらい話である。

また吃の又平というのも『近江むかし話』の中に「江州音頭」として収録されている。又平は土佐光信の弟子だという。吃音がひどかったが、七歳から弟子入りして、兄弟子達にいじめられながら努力した。十六年して師匠に劣らぬ腕になった。師匠には、京一番のきりょうよしといわれる娘があり、又平に同情して世話をやいたた

めに、兄弟子達に告げ口され、又平は師匠から破門される。娘は又平の後を追ひ、ふたりで大津の札ノ辻で大道絵師となつて、大津絵を描きだした、という話である。近松浄瑠璃の「傾城反魂香」にも、大津絵の吃の又平が登場するが、ここでは又平夫婦は貧しい大津絵かき、光信の娘は遊女勝山となっている。

又平の師匠の土佐光信は大永五年(一五三三)九十二歳で亡くなつてゐるが、近松の「傾城反魂香」はその後の代の土佐光起が大和絵の家柄にあつて漢画の狩野風をとりいれ、京都の画壇に返り咲くことをふまえたフィクションだそうである。江州音頭のように一筋の人情話ではないようである。大津絵の絵師は土佐又平治、又平久吉、大津の又平などの署名が残つていて、「又平」をつけるのが習慣となつていたらしい。

有島武郎に「ドモ又の死」という戯曲がある。この作品は大津絵とはまったく関係がないようだけれど、そこに出てくるドモ又は戸部という青年画家のあだ名で、この人もすこし吃音の傾向がある。話は無名の青年画家達が五人で共同生活しながら画をかいてゐるが、飢餓による共倒れを防ぐために、仲間の一人を夭折する天才画家に仕立てあげ、その作品を世間に喧伝して画商や金持に買わせることを企む。その一人を決めるのに、モデルをつとめていた娘に、五人のうちから一番愛してゐる青年を選ばせる。娘は、黙りこくつて醜男で、いるんだかないんだかわからないドモ又を選ぶ。彼女にいわせると、かれが「だんだん、だんだん好きになつた」のだそうである。ドモ又の方も異議はない。そこでかれを夭折の画家に仕立ててモデルの娘と結婚させ、作品は高く売り付けるのである。

この話は、作者自身が、マーク・トウェインの小話から暗示をえて書いたと言つてゐるが、江州音頭の光信の

娘がたくさんの弟子の中から吃の又平を選んだところは、この戯曲と似ている。

大津絵は今でも趣味で描いているひとがあつて、昨年だったか、近くの銀行のロビーに展示されているのを見た。大津絵といへば、鬼の念仏、釣鐘弁慶、槍持ち奴や藤娘など、ユーモラスなものが多いと思つていたが、長い歴史の中で、変化してきたものらしい。国道一号線と京阪電車の京津線の通っている逢坂山のあたりに、外まわりを鯉のぼりのように塗った家が今でもあり、大津絵の絵師の住んでいたものだと聞いている。すこし前までは修理もゆきとどき、よく保存されていたが、現在はどうなっているだろうか。

寛政九年(二五七)の「伊勢参宮名所図絵」の大津追分の図を見ると、旅の人でにぎわっている町の様子が描かれている。その説明に、このあたりは宇治、伏見へ、また京都へ、東国からの旅人の分れ道であるから追分という。総名は逢坂また大津で、この追分から大津領となつて街が続ぎ、針、そろばん、大津絵などの店が多い、とある。それより百年余りも古く、元禄四年(二六三)ドイツ人医師ケンペルの日本誌には、追分村のことを、四百軒ばかりの長い町筋で、小物鍛冶、木材や象牙の挽物師、彫刻師、計器師(そろばん屋)、針金工などがいて、とくに絵師、画商、神仏商が多く住んでいる。かごでここを通りすぎるのに半時間もかかった、と書いてある。今では車窓から見る限り、ただ谷間の静かな町で、わずかに料理旅館の看板が目につくくらいであるが、このように長いあいだ賑わつた街であつたと聞けば、一度、自分の足で確かめてみたいという気持がしてくる。

大津絵について書かれたものをすこし読んでみると、思いもしなかつた歴史があつた。

大津絵の筆のはじめは何仏

芭蕉

元禄四年正月四日

この句によせて山東京伝が、

古くは仏像を描くことをもつばらとせしを知るべし、この頃は天津絵の仏を持仏にかける者多くありし故に、おのづから仏絵行はれ、戯画はかたはらになせるなるべし。

と書いているようで、初期の天津絵は仏画が多く、阿弥陀仏、阿弥陀三尊、十三仏、大日如来、愛染明王、八幡菩薩、千手観音、地藏菩薩、青面金剛、不動明王、達磨さんに弘法大師、恵比寿さんから天神さんとずいぶん種類が多い。これはキリシタンの禁止が始まり、元和から寛永の頃、取締りがきびしくて、何でもよいから仏像のほしい人が多かった。そんな時に、京、天津街道の一角、伏見への分れ道に、ひょっこりと、仏の絵を描き、自分で売る人のあるのを、通行の人が見つけたのではないかと考える研究者がある。寛文元年(二六二)の仮名草子に天神像が売られている様子が見られ、それより以前、寛永十五年(三三六)に島原の乱があったから、天津絵の初めは寛永と推定されるのだそうである。

天和—元禄の頃を天津絵の中期とし、土佐派や他派の新人などが加わって、天津絵は華やかになる。藤娘、鬼の念仏、座頭、槍持ち奴、傘さす女、住吉踊、瓢箪鯉などたくさん絵が生まれている。

十八世紀の終り頃に天津絵は終末期を迎える。絵に贅をいれて処世の心得を説き、封建機構への盲従の役を荷なったとも言われるが、たとえば「猫と鼠の酒宴」の絵に「おそろしきものをにゃんとも思わざる心から身をついととられる」。「鶏」の絵をかいて「鳥さえもその時どきをしるものときにしたがえ身のほどを知れ」という類いのものである。後には天津絵は護符にまでなり、「鬼の念仏」は小児の夜泣きどめ、「藤娘」は良縁、



「雷」は雷よけ、「瓢箪鮫」は水難を避ける、などとされたという。

このような大津絵を代表する画題として「藤娘」と「鬼の念仏」は共にひろく知られ愛されたものだった。中でも「鬼の念仏」は地獄の獄卒に念仏をとなえさせ、奉加帳を片手に布施を求めて歩かせる、その諧謔は誰をも喜ばせ、大津絵の看板にまでのしあげたといわれる。「藤娘」は、なぜ描かれるようになったのかわからないらしいが、近松の浄瑠璃に「藤の花かたげたおやま絵」とあり、客の求めに応じる遊女の踊りであったろうと考えられている。これが歌舞伎の所作事としてとり入れられて「藤娘」の舞台となった。逆のように考えられるが、歌舞伎での初演は文政九年二二二六であり、大津絵の「藤娘」の発生は元禄の頃、十七世紀末ということである。大津絵の歴史のなかに見え隠れする絵師達は吃の又平や与平に名を借りるまでもなく、貧しくまじめに暮らしていたのだらうと思う。夫が絵を描き、妻が色をつけることもあり、草子絵には、描きつつける絵師とそれを店の看板の下で客にすすめる女房も見られる。近松浄瑠璃には、

家貧しくて身代は　うすき紙衣の火打箱　朝夕の煙さへ　一度を二度に追分や　大津のはづれに店借りして  
妻は絵具夫は絵かく　筆の軸さえ細元手上り下りの旅人の　童すかしの土産物　三銭五銭の商ひに……  
とあり、食事もままならない貧しい暮らしがうかがえるのである。

大津駅前の藤娘は、このように二百年ほども描きつづけられた大津絵の歴史を背負って、今日も時計台の上から静かに語りかけているのだらう。見上げる多くの人は、わたしと同じように、藤娘が何を言おうとしているのかに気づかず、あのウォンウォンと響く音楽を何気なく聞いているのではないだろうか。踊らない藤娘に飽きて、

見上げることさえもせずに。

先日、大津で下車して駅の上を走っている国道一号線を越え、山手にある友人の墓地へ行った。その国道をすこし京都の方へ歩けば大谷、追分である。一人で墓への参道を歩いていると、聞き覚えのある音楽が、駅の方から聞こえてきた。音が止んだ時、それが藤娘の時計台の音楽であることを思い出した。午前十時、藤娘は扉を開けて出てきたのだろう。わたしに大津絵の世界を振り返らせてくれた藤娘は立っているだけだった。踊らなかつたからわたしに大津絵を思い出させてくれた。踊る人形だったら意味がまったく違ってくる。それだけで満足して、わたしはうっとり見とれているばかりだったと思う。藤娘のからくり時計は、正しく計画された大津のシンボルだったのである。

父を見忘れた息子 — 法華経巡礼 60 — 1991.5.9 原田憲雄

4.6 さて、世尊よ、その貧しい男は、食べ物や着物を求めて、だんだん、あの黄金・財産・穀物・土蔵・穀倉がいっぱいある人の家に近づいて来るとしましょう。さて、世尊よ、その貧しい男の父は、じぶんの家の門前で、多くのバラモン・クシャトリア・ヴァイシャ・シュードラの群れに取り巻きかすずかれながら、金銀で飾られた、足台のある獅子座にすわり、幾千万億の金の取り引きをし、馬の毛の払子で扇がれています。天蓋でおおわれ、地には散華してあり、宝玉の花輪がかかっているところに、たいへんいかめしく

坐っているのです。世尊よ、その貧しい男は、じぶんの父が自宅の門前で、このようにいかめしく坐り、多くの人々の群れに取り巻かれ、家の主人としての仕事をしているのを見ます。見ると、また、恐れ、おのき、おびえ、身震いし、おぞけだち、尻込みしては、こんなふうを考え、ためりました。「とんでもない、王か、王のようなものにぶつかった。ここにはおれたちのするような仕事はなにもない。さあ、行くんだ。貧しい場末なら、おれたちの食べ物や着物も、わずかの苦勞でえられよう。いつまでもぐずぐずすまい。ここでとっ捕まうて、むりやりに働かされたり、ひどい目にあわぬように」と。

alha khalu bhagavan sa daridra-purusa ahara civarāṃ paryesaṃaṇo nupurveṇa yena tasya praḥḥūta-  
 hiranya-svarṇa-dhana-dhanya-kośa-kośhāgārasya samrddhasya purṣasya niveśanam tenopasaṃkrāmet  
 / alha khalu bhagavan sa tasya daridra-puruṣasya pita svake niveśana-dvāre mahatya brāhmaṇa-  
 ksatriya-vit-chūdra-parisada parivṛtaḥ puras-kṛto mahā-siṃh āsane sa-pādapithe svarṇa-rūpya-  
 pratimāṇḍita upaviṣṭo hiranya-koti-śata-sahasrair vyavahāraṃ kurvaṇ vāla-vyajanena vijyamaṇo  
 vitata-vitane pṛthivi-pradeśe mukta-kusumābhikirṇe ratna-damāhipralambite mahatya rddhyopavi-  
 śtaḥ syat / adṛakṣit sa bhagavan daridra-puruṣas taṃ svakaṃ pīteraṃ svake niveśana-dvāra evaṃ-  
 rūpayaṛddhyopaviśtaṃ mahatā jana-kaṣena parivṛtaṃ gṛhaṇati-kṛtyaṃ kurvaṇam / drṣtvā ca punar  
 bhītas trastaḥ samviśnaḥ saṃhṛṣṭa-roma-kūpa-jāta udviṣṭa-mānasa evaṃ anuvicīntayāmāsa / sahas-  
 aivāyam maya rāja va rāja-mātro v āsādito nasy asmākam iha kiṃ-cit karma / gacchāmo vāyam /

yena daridra-vitthi tattasmakam ahāra-civaram alpa-kṛcchreṇaivotpatsyate / alāp me ciram vilam-  
bilena / ma haivaham iha vaiśitiko va bhvyeyānyatarāṃ va doṣam anuprāpnyam ||

47. さて、世尊よ、その貧しい男は、次つぎだひどい目だ……と考え、恐れおののき、あわてて逃げだし、そこにとどまろうとはしません。さて、世尊よ、富豪の長者は、自宅の門前の獅子座に坐ったままで、一目見るなり自分の息子であると認めるのです。そこでよく見て、満足し、狂おしいまでによろこび、歡喜し、満足と楽しさが生じ、このように思うのです。「不思議なことだ。だがこれで、たくさんの黄金・財産・穀物・土蔵・穀倉を受け継ぐ者ができた。わたしはあれのことを、幾度もいくども思い返した。あの子は自分でここに来てきた。わたしはまた、老い衰えて、齡をかさねているのだ」と。

atha khalu bhagavan sa daridra-purgo dukkha-parampara-manasikāra-bhaya-dhitas tvaramāṇaḥ prak-  
raṇet palāyen na tatra saṃtiśhet / atha khalu bhagavan sa adhyaḥ puruṣaḥ svake niveśanadvare  
siṃhāsana upaviśtas tam svakam putram saha-darśanenaiva pratyabhijanīyat / drśtvā ca punas tu-  
gā udāgra ātta-manaskāḥ pramuditāḥ pṛīti-saumanasya-jāto bhaved evaṃ ca cintayet / āścaryam  
yavad yatra hi nāmyā mahato hiraṇya-suvarṇa-dhana-dhānya-kōṣa-kōṣṭhagārasya paribhoktopalab-  
dhāḥ / ahaṃ caitam eva punaḥ-punaḥ samanusmarāmi / ayam ca svayam evaḥ agataḥ / ahaṃ ca jirṇo  
vṛddho mahalākṣaḥ ||

※前号正誤 一八頁 一一行 daśa(W:diśo)disab(W:vidiśab) → daśa(W:diśo)disab(W:vidiśab)

中国の詩人と仏教

(一三)

1991.5.4

原田憲雄

一五、落 日 (一)

荒城臨古渡

荒れはてた城市まちは古い渡しに臨み

王維 掃嵩山作

落日滿秋山

落日が秋ざれの山にいっぱいだ

大漠孤煙直

大沙漠に ひとすじ真っ直ぐに のぼる煙

同 使至塞上

長河落日円

長河に 赤く円く 落ちてゆく日

落日山水好

落日に 山水のすばらしさ

同 藍田山石門精舎

漾舟信帰風

舟をただよわせ 追い風にまかす

唐の詩人王維には、落日をうたった詩句が少なくありません。これはすでに指摘されていることですが、実は、王維にかぎらず唐代の詩人はおおむね落日や、落日をふくむ時間をうたうことを好んだようです。わたしがそのことに気づいたのは、一九六〇年八月、やはり唐代の詩人である常建について『方向』第九号に「玉琴」という

論文を書いた時でした。

戦余落日黄

戦い終わって 落日 黄いろく

常建 弔王將軍墓

軍敗鼓声死

軍敗れ 太鼓の声は 死んだ

落日山水清

落日に 山も川も清く

同 白湖寺後溪宿雲門

乱流鳴淙淙

乱れる流れは そうそると響く

常建は、八世紀の人で、七二七年、王昌齡という詩人と同時に高等文官試験の進士科に及第、役人になったがうだつがあがらず、引退し、ほかのことはよくわからないのですが、右に掲げたような句があり、清らかな詩風において他の大詩人をしのぐ特異な人です。六十首にみえない作品しか現存しないのに、二十回近く落日またはそれを含む状況や時間をうたっているのです。そこで他の詩人はどうかと調べてみると、李白の詩集には「落日」の語をふくむ句が二十八首あり、そのほか「日落」「日入」「日没」「日暮」「日晚」などの語をふくめて四、五十回が出てきます。杜甫では「落日」二十五回、その他をふくめて七、八十回、そして、さきに掲げた王維は「落日」九、その他をふくめて三十回前後で、孟浩然・王昌齡・岑参・劉長卿・韓愈・柳宗元などにも落日を歌う作品があり、総じて唐代の詩人は落日とそれをふくむ状況・時間をうたうことを好むように察せられました。

すると次には、中国人はずっと昔からそうだったのか、という問題が出てきます。わたしはそれも確かめたく、『詩経』からはじめて『楚辞』、漢代から唐の前の隋代までの詩のアンソロジーである『全漢三国晋南北朝詩』をざっと調べてみました。その結果、いつの時代にはどのような語が詩のなかにどのような頻度で現われるか、といったことは「玉琴」に掲げたので省略し、ここでは結論だけ抜き出し、いまの考えもまじえて説明します。

一、中国古代の人々は、夕暮れを意識にあげ夕陽をうたうことは稀であった。

「古代」というのは、漢の朝廷の基礎がさだまった前二世紀の中頃を境にして、それ以前というほどに考えています。そのころの中国人にとっては、昼は光明であり、活動の時であり、生命であり、善であり、美であり、有であったが、夜はこれに反して、暗黒であり、停止の時であり、死であり、悪であり、醜であり、無であったのです。したがって、悪しきものから善きものへの境目である朝を、朝を告げる鶏の鳴き声や日の出を歌いはしても、善きものから悪しきものへの境目の、日暮れや落日を意識することは避けようとしたのであろうと察せられます。ましてこれを美しいものと感じ、たたえることはなかったのでしょう。今のわれわれからするとふしぎで信じられないかもしれませんが、虹はわたしたちには美しいものになっていますが、これも古代の中国人には、怪しく、忌まわしいものだったのです。このような感じ方の違いがわかっていないと、そこから生まれる考え方も理解が及びかねることになります。

二、落日を凝視し、これを歌うのは、限られた特殊な人だった。

「落日」という語をつかうかどうかはともかく、日暮れや、落ちてゆく日を凝視し、歌った詩人で唐代以前の

ひとを拾うと、屈原・徐幹・曹植・阮籍・陸機・陶淵明・謝靈運・鮑照などということになりましようか。屈原は、前四―三世紀のひとで『楚辭』の代表的な作家。徐幹は、二―三世紀、曹植より二十歳ほど年長だがほぼ同時代で『中論』という儒教論書の著者。曹植・阮籍についてはさきに述べました。陸機は、三―四世紀、陶淵明、謝靈運は、四―五世紀のひとで、謝靈運は陶淵明より十二、三歳若かった。鮑照は、五世紀中頃のひと。いずれもそれぞれの時代の最高の詩人といえましよう。

かれらは同じ時代の人々よりすぐれているために、人々と合わず、孤独でした。前の時代の文化を最高度に自分の教養として受入れていながら、その文化が崩壊して新しい時代が来るのを、たれより早く見通していた詩人です。かれらは他面、夜をうたう詩人でした。落日をうたう詩人は、夜にめざめて実存の暗さをうたわねばならなかったのです。

「日忽忽として其れ將に暮れんとす」と「離騷」でいう屈原が「九章・抽思」で「曼として夜の方に長きに遭う」といい、「情詩」に「落日階庭を照らす」とうたった徐幹が「室詩」に「長夜何ぞ懸懸」とうたい、曹植が「箜篌引」で「光景馳せて西に流る」とうたい「美女篇」で「中夜起ちて長嘆す」といい、「日暮親友を思う」と「詠懷詩」のひとつにいう阮籍が他のひとつに「夜中寐る能わず」というのが、そのいちじるしい例といえましよう。落日への凝視は、人間の心情がそうとう複雑高度にならなければ生まれません。社会一般が悪とするものの中に善をさぐり、醜とするものに美を見出すことは、デリケートな感性と鋭い知性とをもち、その感性と知性に対する自信がなければ、これを述べたり歌ったりすることはできないのです。